

# 都市再生整備計画(第4回変更)

いなむらのひせいびちく  
稲むらの火整備地区

わかやまけん ひろがわちよう  
和歌山県 広川町

平成21年8月

## 都市再生整備計画の目標及び計画期間

都道府県名	和歌山県	市町村名	広川町	地区名	稲むらの火整備地区	面積	150 ha
計画期間	平成 18 年度	～	平成 21 年度	交付期間	平成 18 年度	～	平成 21 年度

### 目標

- メインテーマ 濱口梧陵を核とした災害に強いまちづくりと地域振興  
 目標 1. 濱口梧陵が残してくれた防災の遺産を後世に伝えるべく防災まちづくりの推進  
 目標 2. 全国的に有名となった「稲むらの火」を活用した濱口梧陵関連施設の整備による観光振興と地域の活性化

### 目標設定の根拠

#### まちづくりの経緯及び現況

本町は、和歌山県の中央部有田郡の南に位置し、近代初頭まで「広庄」と称された歴史ある町であり、和歌山市及び大阪市へのアクセスとして国道42号線、JR紀勢本線、及び阪和自動車道へと続く湯浅御坊道路が町内を貫通し、交通便利性の高い立地条件を背景に、人口減少を徹減に止めている。

本地区内には、役場などの行政施設、信用金庫などの金融機関、及び小中学校などの教育施設が集積し本町の中心地として、小さいながらも多様な都市機能を有しており、また文化面においても国指定の文化財 広八幡神社、史跡の広村堤防や濱口梧陵墓など多数存在している。

昨年、南海地震発生時の津波による浸水予測や被害想定が発表され、本町では、地震発生から33分で津波影響が出始め、ピーク時の津波高は最高6.4メートルに達すると発表されている。

住民を津波から守るため、早くから防災に取り組み、自主防災組織は平成10年から組織化をすすめる現在36団体を組織し避難訓練等に取り組んでいるところである。この組織は、自らの命は自分たちで守ろうという精神のもとに各地区で結成されているもので特に高齢者や幼児などの災害弱者を組織的に救出することに重きをおいている。

しかしながら本地区は海岸部に人口密集地があり、一時避難場所である「広八幡神社」や「JAありだ南広支所」、及び「県立たちばな養護学校」への避難路の整備や夜間停電時に対応できる外灯等の施設整備は遅れており、緊急に取り組む必要にせまられている。

また、昔から度々津波の襲来を受け甚大な被害を被ってきた歴史があり、なかでも安政元年の南海地震で大津波が広村を襲った際、濱口梧陵は稲むらに火を放ち、燃え上がる火を目印に安全な高台へと、暗闇で逃げ惑う村人を誘導しました。この実話をもとに「稲むらの火」が描かれ、昭和12年から10年間小学校5年生の国語の教科書にも掲載されました。

この稲むらの火を後世に伝えることや防災教育の啓発のために「津波教育防災センター」が平成19年の完成を目前に現在内閣府や県の協力を得て建築整備中で、本町でも濱口梧陵の関連史跡の整備を図るとともに、これらの施設を核に防災観光拠点形成し地域の活性化をすすめていく計画としている。

以上の整備を推進し「濱口梧陵を核とした災害に強いまちづくりと地域振興」をメインテーマとして防災まちづくりを推進するとともに、濱口梧陵関連史跡の整備等をすすめることで、新しい観光資源として活用し地域の活力維持と地域の振興を推し進める。

#### 課題

地域の歴史・文化を活かした生活基盤施設の整備による防災機能の強化、及び濱口梧陵を活用した観光拠点の形成

- ・地域防災を支える担い手の確保を図るため、生活環境の基盤整備を強化する必要がある。
- ・濱口梧陵が残してくれた防災意識を後世に伝える必要がある。
- ・濱口梧陵関連史跡を観光資源として活用し地域振興を図る必要がある。

#### 将来ビジョン（中長期）

- 1) 防災安全都市の実現による人口減少化の歯止め
- 2) 濱口梧陵関連史跡等地域固有の歴史資源等の活用による地域振興

### 目標を定量化する指標

指 標	単 位	定 義	目標と指標及び目標値の関連性	従前値		目標値	
					基準年度		目標年度
災害時における避難時間	分	南海地震で予想される当地区における津波影響開始時間は35分とされており、避難場所までの最長避難時間を比較	避難場所までの平均避難時間は、36分(日東-八幡線通過コース)となっており避難路、及び夜間停電時に対応できる外灯の整備を図り平均避難時間の短縮を目指す。	36分	H17	34分	H21
自主防災組織の数	団体	自主防災組織の結成団体数で比較	自治会単位での避難により災害弱者の効率的な避難体制を確立する。	36団体	H17	40団体	H21
人口	人	国勢調査による本町人口を比較	避難路等の整備による防災安全都市の実現、及び幼少児の育成環境の整備で人口減少化の歯止めを図り、地域防災の担い手を確保する。	8,071人	H17 国勢調査	8,200人	H21
観光客数	人/年	観光客動態調査による観光客総数を比較	濱口梧陵関連施設の整備や散策ルートの整備を図ることで観光客総数15万3千人を目指す。観光客総数のうち約6割が山間部にある交流促進施設「ほたるの湯」に来館しており、ピーク時にせまる約2万人の増加を目指す。	133,000人 (ほたるの湯8万人)	H17	153,000人 (ほたるの湯10万人)	H21

## 都市再生整備計画の整備方針等

### 計画区域の整備方針

整備方針1（濱口梧陵が残してくれた防災の遺産を後世に伝えるべく防災まちづくりの推進）

・高齢者等の災害弱者を一時避難施設まで安全に誘導するために、道路幅が広い安全な道路の整備、及び夜間の避難を想定し停電時の避難行動を助ける照明設備の整備を推進する。

整備方針2（全国的に有名となった「稲むらの火」を活用した濱口梧陵関連施設の整備による観光振興と地域の活性化）

・本地区を中心に点在する濱口梧陵関連史跡を整備し、一体的な防災観光拠点の形成を推進するとともに、濱口梧陵が残してくれた防災意識の伝承を図る。

方針に合致する主要な事業

基幹事業＝道路：日東・八幡線改良

基幹事業＝地域生活基盤施設：避難誘導灯整備

基幹事業＝高質空間形成施設：広西10号線改良、湯浅・広港線改良

基幹事業＝地域生活基盤施設：案内サイン設置

基幹事業＝公園：(仮)児童公園整備、(仮)東濱口公園整備、(仮)緑地公園

基幹事業＝既存建築物活用事業：濱口梧陵記念館整備

提案事業＝濱口梧陵記念館整備

提案事業＝広村堤防整備

提案事業＝(仮)稲むらの火の館PR事業

提案事業＝津波防災教育センター屋上サイン設置

提案事業＝観光案内所整備

### その他

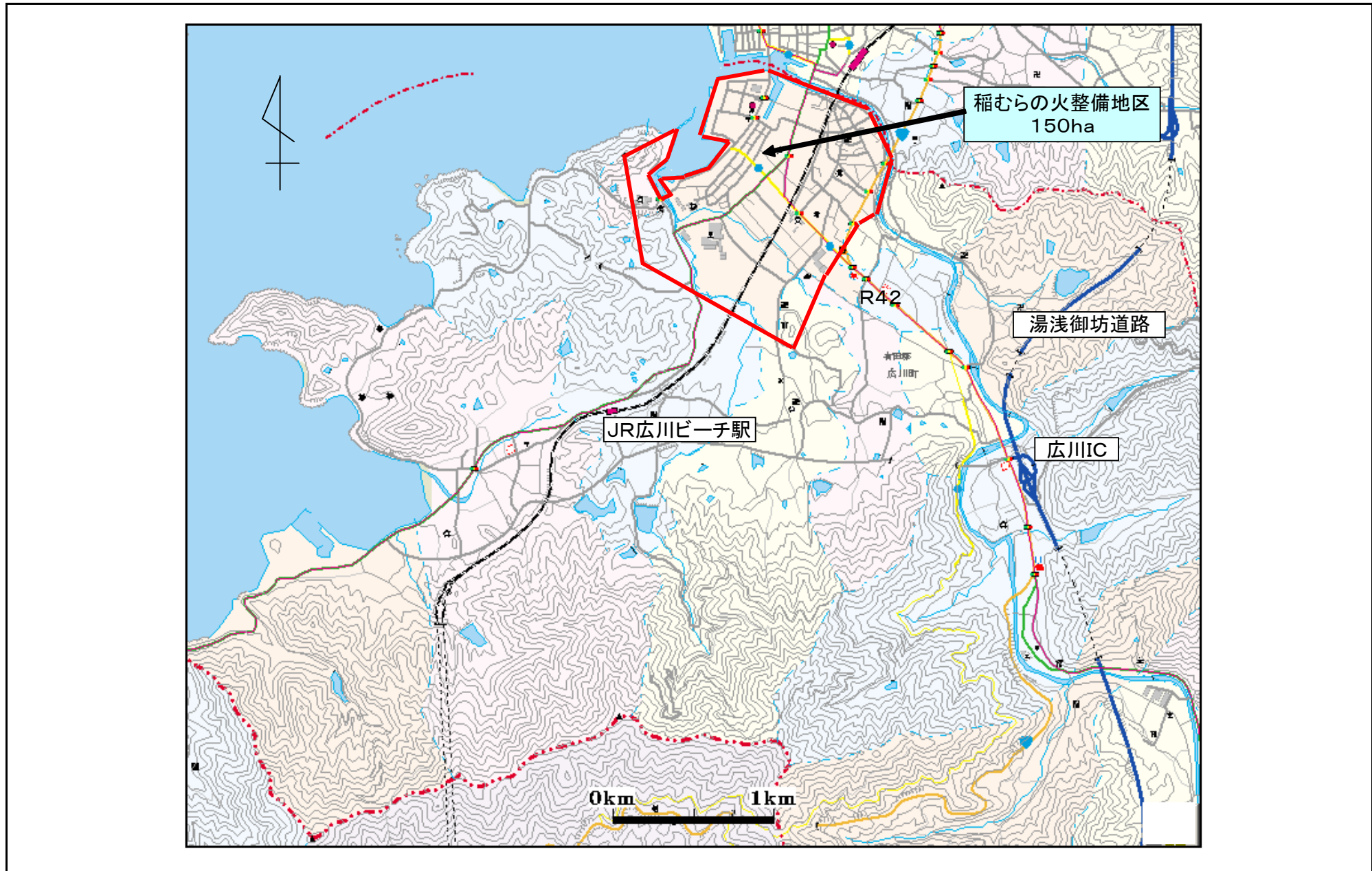
平成16年12月にスマトラ大津波が発生、津波の恐怖が世界を駆け巡るなか、平成17年1月12日にNHKの「その時歴史は動いた」（百世の安堵を図れ ～安政大地震・奇跡の復興劇～）で濱口梧陵が放映され、全国的に有名となりました。

これを期に、濱口梧陵が建設した「広村堤防」などに訪れる見学者が増え、堤防などを案内する「語り部」ボランティアサークルも結成され、また住民主導で始まった「稲むらの火祭り」への地域住民の積極的な参加など住民レベルでの盛り上がりも年々盛んになっている。



# 都市再生整備計画の区域

稲むらの火整備地区(和歌山県広川町)	面積	150ha	区域	広川町大字広、及び和田・上中野・山本・南金屋・名島の一部
--------------------	----	-------	----	------------------------------



ひろがわちょう  
稲むらの火整備地区(和歌山県広川町)整備方針概要図

目標	濱口梧陵を核とした災害に強いまちづくりと地域振興	代表的な指標	災害時における避難時間(分)	36分	(17年度) → 34分	(21年度)
			自主防災組織の数(団体)	36団体	(17年度) → 40団体	(21年度)
			人口(人)	8,071人	(17年度) → 8,200人	(21年度)
			観光客数(人/年)	133,000人	(17年度) → 153,000人	(21年度)



この地図は作成にあたっては、国土地理院の表示を以て、同院発行の数値地形図5000(空射)・5000(空撮)および数値地形図5000(空射)・5000(空撮)・5000(空撮)・5000(空撮)・5000(空撮)・5000(空撮)を参照し、また、国土院発刊の「数値地形図5000(空撮)」を基として作成しています。地図は株式会社イダハの「MapInfo」を使用しています。  
© 2017, IIDA Shokai, Inc.

凡 例	
	■基幹事業 案内サイン(町案内)設置
	■基幹事業 案内サイン(濱口梧陵関連史跡)設置
	■基幹事業 避難誘導灯(風力・太陽光型)整備
	■基幹事業 避難誘導灯(蓄電池内蔵型)整備